

「生きる」と向き合う私の「生き様」を語る

Ways of living: 8 stories of researchers who have made themselves faced with the “realities of living”

伝 康晴[†], 諏訪 正樹[‡], 藤井 晴行[§]

Yasuharu Den, Masaki Suwa, Haruyuki Fujii

[†]千葉大学, [‡]慶應義塾大学, [§]東京工業大学

Chiba University, Keio University, Tokyo Institute of Technology

den@chiba-u.jp

1. 概要

「知」とは何か. それは「よりよく生きる」ための資産である. 「生きるための知恵」を探究すること. それが「知」の科学の目標であったはずである. いわゆる「科学」的な方法論 (条件統制された行動実験・計算機シミュレーション・脳機能測定) によっては接近できない, 人間が生きていく中で直面せざるをえない現実世界の諸要因—状況依存性・個別具体性・個人固有性・一回性・偶然性・突発性など—と真摯に向き合う学問的方法論の必要性を, 本オーガナイザーたちはことあるごとに提起してきた[1-7]. そのような方法論として, これまで実にさまざまなものが提案されてきた[8-18].

研究のやり方 (方法論の選び方) は, その研究者の「生き様」そのものである. 本 OS では, 「生きる」リアリティと向き合うさまざまな研究者たちの「生き様」について, なぜそのような研究をその方法で行ってきたのか, それはその人の研究者としての, あるいは, 日常の人生のどんな生き方が礎になっているのか, をつらつら語っていききたい. それは「これからの認知科学の進むべき道」を考える一助になると期待する.

2. 語り部たち (五十音順)

- 加藤文俊 (慶應義塾大学環境情報学部)
研究分野: コミュニケーション論、メディア論、定性的調査法
話す内容: SNS に写真をアップし続けていたら、11年で5700枚くらいになったという話
- 木村大治 (フリー)
研究分野: 人類学、コミュニケーション論
話す内容: 人類学でどういう仕事が面白いと思えるのか

- 栗原伸治 (日本大学生物資源科学部)
研究分野: 居住文化、建築人類学
話す内容: 住まいのリアリティを求めたフィールドワークから生のリアリティを感じる日常へ
- 小橋康章 (株式会社大化社)
研究分野: 支援基礎論
話す内容: 実験ゲームの装置構築に夢中になっていた私が発表しない研究者になったわけ
- 諏訪正樹 (慶應義塾大学環境情報学部)
研究分野: 身体知の学び、研究方法論 (一人称研究)、生活研究
話す内容: 源は関西、転校、個/和、形、走る、渦中...
- 伝康晴 (千葉大学人文科学研究院)
研究分野: 相互行為分析、フィールド認知科学
話す内容: AI からフィールドへ、偶然と必然、恩師、反発心・反骨心
- 西村ユミ (東京都立大学健康福祉学部)
研究分野: 医療現場の協働実践、現象学的研究
話す内容: 身体の観察/測定から、身体と共存/交流するフィールドワークへ
- 藤井晴行 (東京工業大学環境・社会理工学院)
研究分野: 建築計画基礎、Design Computing and Cognition
話す内容: 客観と主観の渚にて

文献

- [1] 伝康晴・諏訪正樹・藤井晴行 (2015) “特集「フィールドに出た認知科学」編集にあたって”, 認知科学, Vol. 22, No. 1, pp. 5-8.
- [2] 諏訪正樹・伝康晴・藤井晴行 (2015) “フィールドに出た認知科学”, 日本認知科学会第 32 回大会オーガナイズドセッション.
- [3] 伝康晴・諏訪正樹・藤井晴行 (2016) “フィールドに出た認知科学2”, 日本認知科学会第33回大会オーガナイズドセッション.

- [4] 藤井晴行・諏訪正樹・伝康晴 (2017) “フィールドに出た認知科学3”, 日本認知科学会第34回大会オーガナイズドセッション.
- [5] 伝康晴・諏訪正樹 (2018) “「生きる」と向きあう科学：方法論からの解放”, 日本認知科学会第35回大会オーガナイズドセッション.
- [6] 諏訪正樹・青山征彦・伝康晴 (2019) “新しい認知科学には何が必要か”, 日本認知科学会第36回大会オーガナイズドセッション.
- [7] 諏訪正樹・青山征彦・伝康晴 (2020) “特集「「生きる」リアリティと向き合う認知科学へ」編集にあたって”, 認知科学, Vol. 27, No. 2, pp. 89-94.
- [8] 中村雄二郎 (1992) 臨床の知とは何か, 岩波書店.
- [9] 木村敏 (2005) あいだ, ちくま学芸文庫.
- [10] Nakashima, H., Suwa, M., & Fujii, H. (2006) “Endo-system view as a method for constructive science”, *Proceedings of the 5th International Conference on Cognitive Science*, pp. 63-71.
- [11] 諏訪正樹・堀浩一(編著), 伊藤毅志・松原仁・阿部明典・大武美保子・松尾豊・藤井晴行・中島秀之(著) (2015) 一人称研究のすすめ—知能研究の新しい潮流—, 近代科学社.
- [12] 佐伯昉(編著) (2017) 「子どもがケアする世界」をケアする—保育における「二人称的アプローチ」入門, ミネルヴァ書房.
- [13] 高梨克也(編著) (2018) 多職種チームで展示をつくる—日本科学未来館「アナグラのうた」ができるまで (フィールドインタラクティブ分析 1), ひつじ書房.
- [14] 西村ユミ (2018) 語りかける身体—看護ケアの現象学, 講談社.
- [15] Takanashi, K., & Den, Y. (2019) “Field interaction analysis: A second-person view-point approach to *maai*”, *New Generation Computing*, Vol. 37, pp. 263-283.
- [16] 諏訪正樹(編著), 伝康晴・坂井田瑠衣・高梨克也(著) (2020) 「間合い」とは何か—二人称的身体論, 春秋社.
- [17] 諏訪正樹 (2022) 一人称研究の実践と理論—「ひとが生きるリアリティ」に迫るために, 近代科学社.
- [18] 榎本美香(編著) (近刊予定) 三夜講で火祭りを準備する—野沢温泉道祖神祭りの伝承を支える仕組み (フィールドインタラクティブ分析 5), ひつじ書房.